

授業づくりと世界づくりを結ぶ

——ブリッジとしての教師を生きる

自由の森学園 菅間 正道

みなさん、こんにちは。私は、自由の森学園（埼玉・飯能市）で 20 年ぐらい社会科の教員をしています。

（1）イマドキの高校生をどうみるか

まず「イマドキの高校生をどうみるか」ということから話をしたいと思います。

僕は 18 年間中学・高校の担任を続けてきましたが、今年は徐々に副担任になり、若い新人の先生について高 1 学年に所属しています。今日は教育実習生の方々に話す場なのですが、職業柄いろいろなところで、例えば友人とか、あるいは教育と関係ない人に「高校生ってどういう人なのか」とか、「イマドキの高校生って何を考えているのか」などと聞かれることがあります。しかし、今まで冴えた答えができたことがない。つまり、高校生とは「こうである」とは到底言えないというか、目の前で見ている高校生は本当に多様、いろいろな高校生がいる。小学校 3～4 年生ぐらいじゃないかという幼稚な高校生もいる一方、保護者より老成しているような高校生もいる。つまり「一律に語れない／一概に言えない」のです。

みなさんが実習へ出かけていく地域、学校も進学校、課題山積校、中堅校、男子校、女子校、公立、私立、いろいろでしょう。ですから、高校生というのを一括りに語れないというところをまず前提にしたいと思うんです。

とはいえ、僕の理解で言えば、高校生理解

や把握の一つの視角として、二つのキーワードがあると思っています。

一つは、中西新太郎さんという社会哲学の研究者がずっと昔から言っていることですが、「高度消費社会化・個体化」という問題です。僕は持っていませんが、おそらく多くのみなさんは持っているだろうスマートフォン、iPad など、僕みたいなハイテク機器音痴のおじさんが扱えない、さまざまな機器を巧みに操って、1 人の世界に引きこもることができる。スマホからのぞく世界は底なし沼の宇宙みたいなものでしょう。そういう機器に象徴される「高度消費社会化・個体化」の世界に彼らは生きているわけです。

さすがに、今この瞬間に教室でスマホをいじっている人はいないようですが、現在高校現場で大変なのはスマホをどうするかです。徹底的に鎮圧しようと思っても、持ち込んでくる。教師の話よりスマホの世界のほうが何倍も切実なわけです。教師にはちょっと怒られて、悪くても一日取り上げられればいけれど、スマホの世界で、SNS だ、既読だ、即レスだと、そっちのほうがはるかに切実で大変。少なくとも、僕の高校時代には全くみられなかったものです。

「高度消費社会化・個体化」の文脈で言うと、僕の高校時代はウォークマンが出た頃の頃でした。外界と遮断したかったらイヤホンをして、スイッチオンで音楽を聞いて、自分の好きな世界に入り込めた。あるいはまた漫画を読むぐらいが教室の風景でした。

もう一つは「貧困化」という問題です。詳しくはお話できませんが、『ドキュメント 高校中退』（ちくま新書）という本を、青砥恭さんという元埼玉の県立高校の先生が書いています。想像を超えた貧困にあえぐ高校生の姿が描かれています。例えば高校生になるまで1人で電車に乗ったことがないひとがいる。うそだろう、そんな人、いるはずがないって思うでしょう。でもそれも事実なのです。あるいは、やっとの思いで高校へ行ったけれど、学費が払えなく、どんどん生徒が辞めていくとか、そういう世界に生きているのもまた高校生ということです。

スマホを巧みに操って、消費世界、ネット情報をあたかもサーフィンしているかのように見える高校生も、高校生になるまで電車に1人で乗ったことがない、人と目を合わせて話したことがない、そういう高校生もいたりするわけです。だから「イマドキの高校生は…」とひとくくりに語れない。

みなさんが実習に行かれる高校は、高校中退とか貧困とは無縁だよ、という方もいるかもしれません。しかし、少なくともそういう世界があるということ、生徒の成長環境、生活背景として、そういう補助線をひいてみる必要がある、ということは頭の片隅に置いておいてください。

（2）「共通言語」は容易につくれない

この「高度消費社会化・個体化」ゆえに教室内に容易に「共通言語」がづくりにくい、つくられにくい状況があります。

自由の森学園は3年間持ち上がりです。去年まで担任していた僕のクラスの様子を頭の中に描いてみます。わりとクラスの中心的な生徒、Mという女の子は、中国舞踊部の部長で踊りとクラブをどうまとめて率いていくかに一生懸命。その隣に座っている生徒、Rは60年代のリズム&ブルースが大好き。サム&

デイヴとか、Booker T & the MG'sとか、そういうのをそれこそスマホでノリノリで聴いている。

「菅間さん、サム&デイヴ、いいよね」と言われます。僕もわりとポップ音楽には詳しいので、「いいよね。カッコ良いよね」と応える。けれど、じつはそんなに詳しいわけではない。風景の描写を続けると、中国舞踊部の隣にはサム&デイヴを聴いている子がいて、その隣ではカードゲームをやっている子がいて、その隣に演劇に夢中な子がいて、その隣には難しい分厚い生物学か何かの本を読んでいる子がいる。それは大学生もそんなに大差ないのかなあ。それを否定しているわけではないんです。言いたいことは、自分の持っている（サブカルチャー的）世界があまりにも個別バラバラ、細分化されているんだ、ということなのです。だから、サム&デイヴが好きな子と中国舞踊に夢中な子との間では、容易に会話は成り立ちません。「これ、いいよね」と言っても、「なに、この古臭い音楽」という感じ。簡単に、高校生同士話題が合うというわけではない。つまり「共通言語」が成立し難いのです。

逆に僕は、教師という仕事の一つおもしろいところは、そういう「個別」「一人ひとり」いろいろな世界がある、ということ。「社会勉強」できることにあると思います。僕は昨日、高校1年の歴史の授業で幕府派、反幕府派とか明治維新に入る幕末の頃の話をしていました。で、攘夷派の説明をしていたら、「あ、銀魂」だと言うんです。みなさん、「銀魂」って知っていますか。知っている人？ すごい手が挙がっている。そうなんだ。僕は知らなかったんです。攘夷派と説明したら、「銀魂」と言われたので、「銀魂って何？」と訊き返しました。そう、だから、そういうのはいちいち訊けばいいんです。授業に関係ある脱線だったら付き合ったら良いんじゃない。「銀魂って何？」と。そうすると、得々と語る高校生

が教室に何人かいる。いい加減なところで、わかった、ありがとうと言わないと、延々話されても困りますが。知らないことは知ったかぶりをするより生徒に訊く。そういうコミュニケーションのとり方も面白いですよ。

消費社会やネット情報の世界を教師が把握するなんて絶対不可能だと思います。だから適当に付き合っ、いい距離を取ればいいですね。みなさんは年齢も近いしね。

(3) 標準的授業は3S、チョーク&トーク

さて、みなさんが実習で高校生と向き合う大半の時間は授業でしょう。その時間こそが「メインイベント」「真剣勝負」の時間です。巷間言われる、標準的な授業シーンは次のようなシーンです。

一つは“3S”です。教師が一生懸命しゃべっているけれど、生徒は寝ている、Sleep。次に、あんまり教師ばかりしゃべっているのもさびしいから、「山田君」とか言って指すけれど「わかりません」って言って苦笑いをされる、Smile。最後に、やり取りをつくろうと思って生徒にいろいろ質問をぶつけるけど、誰も反応してくれない、シーンの Silent。

チョーク&トークも、同じことを指しています。

授業のイメージというのは、自分が受けてきたものを良くも悪くも土台にして組み立てざるをえません。自分が受けてきた授業、「あれはいい授業だな」「全部つまらなかったな」など、授業についていろんな記憶があるはず。それとも、あまり印象に残っていないのかな。僕は中学、高校時代から教師になりましたので、どちらかという好きな授業には向き合っているほうでしたが、大半の授業は正直言っておもしろくなかったです。

若いうちは生意気ですから、偉そうに「おれがやったほうがうまくできる」みたいな感

じでした。大体高校生の頃の先生の仕事のイメージは、教師の頭の中にある引き出しを適当に開けてしゃべっているっていうもんです。授業準備や教材研究という言葉も知らないし、たくさんの準備をして授業に臨んでいるなんて夢にも思わない。ところが、何事もそうですが、見るのとやるのでは大違いです。人の批判は簡単にできます。この授業、あの先生、つまらない。じゃあ、オマエやってみろって自分にブーメランが返ってきて。その自縄自縛の20年間だったような気がします。「今日はいまよくいったな」「合格点だな」という授業が中々できないなと思いながら日々試行錯誤、悪戦苦闘をくり返しています。

みなさんが教育実習に行って、やったぜ！とか、会心の授業ができた！というのは、かなり難しいと思います。今この時代に授業が成立したり、結構いい授業ができたというのは、容易なことではない。だから、仕方がない、じゃなくて「お互いに頑張ろう！」ということが言いたいんです。みなさんが現場に行けば「先生」と呼ばれるから、同じ土俵に立つわけ。共に頑張ろうというエールを送りたい。

チョーク&トークのことを少し付け加えると、この言葉を最初に教えてくれたのは、今は日大の先生になりましたが、昔、ICU高校で教員をしていた渡部淳さんという人です。教材研究を一生懸命やって高校生に——ICUはわりと帰国生が多いので——授業をしていたら、「先生はなんで1人で授業をしているんですか。全然おもしろくないです。そういう授業を何と言うか知っていますか。チョーク&トークと言うんです。バーツと黒板に書いて、それを初めからバーツと説明して、で、キンコンカンと終わりの鐘が鳴る。私たちはどこに参加すればいいんですか！」と突き上げを食らう。淳さんはこれを「帰国生ショック」と言っています。先生は教材研究をして一生懸命しゃべったけれど、生徒はただ、そ

れをそのまま、黒板を写しているだけ。

では、チョーク&トークを超える授業とはどういう授業か。淳さんは、そこから彼なりの努力と挑戦が始まるのですが、それはそれで大変難しい。チョーク&トークを全否定はしません。部分的には仕方がない。けれど、自由の森学園の授業は90分ですから、チョーク&トーク一辺倒だけでは絶対にもたない。チョーク&トークと揶揄されることの本質は、「考えていない、参加していない授業である」ということです。生徒の声が発せられたり、お互いの意見を聞き合ったり、思考が紡がれることがない。そういう授業の典型・象徴として、日本の3Sやチョーク&トークが批判されているんだと思います。

ではこの背景には何があるのか。東アジア全体の文化状況もあるのですが、一つは「学力狂騒・狂走」です。両方ともに「競争」の字を使っていませんが。それと「正解（暗記）主義」です。こういう授業がメインストリームを占拠するとなると、お互いの声を聴き取ったり、議論したり、思考を紡いだりというのは極めて難しい。生徒は生徒で「それで答えは何なの？ 点数を取れるの？ 大学へ行けるの？」という批判を受ける。逆にチョーク&トークや3Sを超えようと思った授業を！と思って勢よく教室に乗り込んだとしても、「先生、そんなのいいから早く答えを教えてください」「人の意見を聞くなんて時間の無駄です」というふうに批判にさらされている僕の仲間もたくさんいます。そこで闘っています。

ですから、自分はどんな授業をしたいのか。何を大事にして、どんな哲学で授業をつくらうとしているのか、が問われる。ちょっと批判されたらすぐ変えるのか。「生徒のニーズ」という言葉もあって、もちろんニーズは大事ですが、みなさんはどんな授業をしたくて現場に行くのか。教師になりたい人、できればなりたい人、いろいろな人がいるのかもしれない。

ません。すぐにできなくてもいいから、理想の、憧れの授業を胸に描いて現場にいて欲しいと思います。理想があるから妥協があるのです。理想がなければ挫折もありません。ある願いがあって、現実が伴わないからギャップが生まれるし、そこを埋めようとする。大事なものは「どんな授業をしたいのか」ということです。

おれは一級のトークでいくぜ！ それもいいでしょう。たくさんの知識を散りばめながら、時に笑いを織り込んで喋ってください。僕は「こういう授業が絶対に正解だ、というのではない」と思っています。授業も教師もいろいろな個性があるので、とつとつとしゃべるのも一つの個性です。現場にはいろいろな教師がいていいと思います。

僕の場合は、先ほども触れたように、中学・高校で受けてきた授業は本当につまらないと思ってきたので、それを「反面教師」に、必ず生徒との対話を入れよう、やり取りを入れよう、ディスカッションのある授業をしようと思って、それを目指してやってきました。しかし、同僚の教師たちは、必ずしもそのようにやっているわけではありません。「菅間さんみたいにできないし」と。それはそれでいいんですよ。競争や比較ではありませんので。みなさんが実習校に行くと、いろんな授業のパターンがあると思います。実習生の特権はいろいろな人の授業を覗かれることです。だから、どうかたくさんの人の授業を参観してください。教材研究は、事前にできること、机上でできることは全部、現場に行く前に済ませてしまう。現場に行ってもできることはたくさん先生の教室に入り、多くの教師や生徒と対話することです。本とのにらめっこは、現場に行く前にできますから。

教材研究なんて、どこまでやってもキリがありません。どんなに細かい授業案を作ってもそのとおりに決まらないうまい。また授業案どおりが良い授業だということもない。だ

ったら参加することです。そして、実習生同士、お互いの授業を批判するのはいいけれど、批判より、こうしたらいいよと言える関係ができるといいですね。僕も実習担当として心がけていることがあります。「今日の授業ダメだったね」という、ダメ出しは簡単です。じゃあ「どうしたら良いのか」を言ってあげないといけない。実習生同士でそんな支え合いができればいいですよ。

「学力狂騒・狂走」や「正解（暗記）主義」が広く日本の高校教育を覆う中で、学ぶという意欲が他者との比較の中でつくられていきます。あいつに勝ちたいとか、あの人に負けたとか、優越感と劣等感で勉強する動機がつけられていきます。本来、何かを知る、世界が広がるというのは人との比較ではないと思うんです。そういう勉強動機だけで追い立てるといえるのはどうなのか。現場では、「競争化、管理化、効率化、孤立化」の4K化が進んでいます。生徒同士も競争させられ、教員同士も競争させられています。

埼玉の私学は48校。この中で埼玉の私学に行く人もいるかな。多くの私学では、東大、有名大学に入ることが高校の存在証明なのです。やれGMARCHだ、やれ大東亜帝国だ、と。ある私学のスローガンは「考えるな、覚えよ」です。そういう文脈の中で今僕が言ったような、「みなさん、ちょっと工夫して楽しい場をつくってみよう」なんて煽られてやったら、おまえのせいで痛い目に遭ったと後で恨まれるかもしれません。「考える授業なんてやめてくれ」、「とにかく効率よく知識を伝えるんだ」、そんなふうに言う実習担当教師もいるかもしれません。そうしたら、そこと上手く付き合いながらみなさんがどうゲリラ戦を展開するかです。もし、議論の授業をしたいなら、知識を伝えるところは穴埋めなどのプリントでやって、5分でも10分でも、みんな、この点について隣の人と話してみない？ で、全体で議論してみない？とか。そのぐらいの

自由度、裁量はあるのではないのでしょうか。

これから現場で生きる教師は、したたかでないダメですよ。「清く、正しく、美しく」だけでは立ちいかない。現場はしんどい。けれど、そのしんどさにそのまま巻き込まれてはいけない。したたかに、ときには「ずる賢く」いかないとダメです。これは実習生も同じ。自分はどんな授業をしたいかというめあてが大事です。そのための攻防です。厳しいと思いますが、みなさんにとって1回でも10分でも、やってよかったな、楽しかったなと思える時間、授業があることを願っています。

（4）論点を定め、議論をつくる

次に交わりとか関係性の問題です。

よく言われるように、今の若者たちは、やさしい。過剰に気遣いと配慮をする。いつのころからでしょうか、「地雷を踏む」という表現が教室で使われるようになりました。

日本の近現代史では、10年に1回戦争をしてきたのですが、授業は戦争の歴史に到達しないで終わってしまうことが多いようです。また戦争の授業も自分たちのリアリティから遠いし、今の高校生からしたら大昔のように聞こえるのかもしれませんが。しかし「地雷を踏む」というリアリティはあるわけです。だから、「遠い戦争」の一方、「足元の戦場」感には若者にはある。それを証明するようなさまざまな名付けや言葉がある。

KY（空気を読めない）、友だち地獄、友だち幻想、スクールカースト、便所飯など、さまざまあります。状況が言葉をつくり、言葉が状況をつくります。みなさんの高校時代にすでにあった言葉もあるかもしれませんが、教室で「地雷」を踏むという表現が出てきたり、友だち関係が地獄だと言われる。

この状況に、一つの論点について自由に意見を言ってみようと言ったらどうなるか。「学力狂騒・狂走」「正解（暗記）主義」空間であ

り、かつまた、「過剰配慮」空間で、「自由に議論しよう」と提起したらどうなるか。他者にどう思われるか、変なことを言う人と思われるのか。ただでさえ日本人は自分の意見を言えない、言わないという状況があるのに、それに輪をかけて、議論を組織するなど可能なのか。今日は実践報告そのものではできませんが、僕なりに試行錯誤して、議論のある授業をつくっています。

ちなみに、今年の僕の日本近現代史の1回目の授業開きはこんな感じでした。「みんな、去年、宮崎駿のジブリ映画『風立ちぬ』観た？」すると7人ぐらい手が挙がる。「それじゃ、『風立ちぬ』の主人公の堀越二郎について考えよう」と。これだったら日本の近現代史の細かい知識がなくてもいけるでしょう。堀越二郎、彼は小さいころから格好いい飛行機を作りたいかった。ときは戦争の真っただ中。彼は三菱重工業に入って零戦の設計図を描いた、製造に携わった。零戦は緒戦においては中国で「活躍」し、敵機を落したけれど、後半は特攻に使われた。彼の生い立ちをざっと説明して「堀越二郎は零戦の設計士です。この堀越二郎に戦争責任はあるのか、どうか。」この論点でいこう！と。そうしたら、これは結構議論になります。堀越二郎に戦争責任はあるかと板書して、戦争責任がある、ない、それともう一つ、NA（ノー・アンサー）と書く。何でもかんでも議論で二者択一はよくないけれど、二者択一にしたほうが言いやすいこともあります。堀越に戦争責任があると思う人、3分の1。ないと思う人、3分の1。NAの人、3分の1。見事に3分割に意見が分かれました。じゃあ、お互いに意見を聞いてみようって。高校1年生のクラスは新生で、まだ固い雰囲気だけれど、こういうテーマだったら議論できそうというのをポーンと投げ込んでみる。すると、隣の人、クラスの人が何を考えているか見えてくる。お互いに何を考えているのか、共感や差異が浮かび上がる。わからない

って人がいていいんです。意見がみんな違ったら、KYにはならないのですから。また、こういう論点は簡単な「正解」はない。

いじめやKYが発生するのは、ある多数派、主流派がいるからです。そうでない差異や少数派に向かって、いじめや迫害というかたちで囲い込んでいくわけです。各々が違った意見を言っていたら、みんな違うので、その人個人を特定に継続していじめたりとはならないはずでしょう。いじめの問題も簡単ではないので、「はず」と言っておきますが。簡単にいじめがなくなるとは僕も思っていません。ただ少なくとも、いじめや迫害の教室空間で「地雷を踏む」という経験をしている人がいたら、そういう人の苦しさや辛さを1ミリでも1グラムでも取り除いてあげたい。教師の力なんて微力だけど、何とかしてあげたいと思う時、教師のできることは、「世の中にはいろいろな意見が存在しているんだ」ということを示すことです。「人間というのはいろいろな人がいて、考え方や意見はいろいろあるんだ」ということを教室で可視化する。それがほんの少し、いじめや迫害の雰囲気をやわらげるのに寄与できるかもしれない。そんな思いも込めながら授業をしています。

（5）教室は「戦場」というリアリティ

雨宮処凜さんという、作家でプレカリアート運動という反貧困運動にコミットしている方の本の中に、印象的なエピソードがありました。彼女はアトピーが激しくて、家庭でもお母さんが勉強しろ、勉強しろと言って、居場所がなかった。学校でもアトピーなど容姿のことを含めてすごいいじめられていて、リストカット、オーバードーズ、パンクバンドの追っかけ、いろいろな経験をくぐってきた壮絶な生きざまをしてきた人です。彼女は一時期、右翼団体に入りました。その時に、戦後の民主主義を勉強したわけです。その中で

こういうことを習った。1950年代初頭、朝鮮戦争が起こって「教え子を戦場に送るな！」と日教組が言ったと。で、これを聞いて雨宮さんは「はあ？ この先生たち、何言ってるの。教え子を再び戦場に送るな？ 私は毎日戦場に行っている。私を含め被害者もたくさん出ている」と思ったというのです。

率直に言って、僕は毎日学校の教室に通うこと＝「戦場に行く」というリアリティを持っていません。授業がつまらないとか、いやなヤツがいるとか、そういうことはあったけれど、教室は戦場である、という認識はなかった。雨宮さんは僕より10歳ぐらい下じゃないかな。でも、30代半ば以降くらいの人には確実にそういうリアリティがあったわけです。そういう人たちに向かって、教室、このよきもの、学校、この素晴らしきもの、と語るのは相当ずれている。だけど、僕たちが主に生徒たちと関わるのは教室や学校です。そこで子どもたちと向き合うわけですから、ここのジレンマがすごくあります。かといって、みんながみんな雨宮さんほどしんどかったわけではないとも思うけれど、実際問題、残念ながらいじめや迫害はかなり広範に広がっていますので、そういう空間に向き合うという大変さは結構あるということです。

過剰な気遣いと配慮、地雷が埋め込まれた空間で、安心や安全とほど遠い状況下、子どもたちは日々戦場を辛うじて生き延びている、また生き凌いでサバイバルしている。そのように見る視角も必要だということです。自戒を込めて言えば、自分が経験した教室空間や学校空間を今の高校生にあてはめてはいけません。それはあなたが経験しただけの話です。教育は自分が被教育経験を持っているぶん、何か知ったつもり、わかったつもりになるけれど、そうでない人たちや、そうでない空間がそこにあるかもしれない。だから、「わからないけれど、わかりたい」。今を生きる高校生をわかりたいという気持ちは大切です。それ

を持ち続けていきたい。だから僕は生徒にすぐ「わかる」とは言いません。個人面談などをした時、「いろいろ大変だな。そうか、辛かったな。だけどもし良かったら教えてくれ」と。これも聞き取るしかないわけです。年ももうだいぶ離れてしまったし、そう簡単に「わかる、わかる」とは言えません。簡単にわかるわけじゃないですよ。

(6) <解なき会の快>を楽しむ

今の高校生にどう向き合ったらいいのか、どんなスキルがいるのか。ハウツーやノウハウは軽々しく言えません。あったら僕が聞きたいぐらいです。そこで少し抽象的なことになるかもしれませんが、大事だなと思えることについていくつかお話しします。

一つ目、教育実習にいくみなさんには酷な要求かもしれませんが、みなさん1人の力でできるとは思わないけれど、今言ってきたような、かなりしんどい空間に高校生が生きているとすると、どうやったら教室や学校を安心・安全、そこにいていい、あなたと同じでなくていい、いやなことはいやと言える空間にしていけるか、ということです。少なくともこれから実習に行こうとしているみなさんは、教科は違えど、明日の市民をつくりたいと思っているんじゃないですか。細かいことはさておき、この社会の担い手であったり、この社会の一員であったり、もうちょっと人間らしい社会をつくる市民であってほしい。この世は生きるに値するし、その人の人生が幸せになってほしいと願って教壇に立とうとしているんだと思います。

しかし、それはとっても大変だということ。今日は繰り返して言ってきましたね。いわんや教育実習という2週間か3週間のレベルで、安心・安全の空間が簡単に立ち上がるとは思っていません。しかし、絶対にそれができないかということ、先ほど言ったように5分とか

10分でもその芽を、今日の授業、ちょっとおもしろかったという切り口から、彼らに他者の認識と出会わせたり、教室の認識を少し変えていくことができるかもしれない。

そこを諦めないでほしい。先ほど『風立ちぬ』をめぐる授業開きをしたと言いました。それは、映画の評判や批評を見た段階から、早く高1の授業でやりたい！ってずっと思っていたんです。1回目でやろうって。やりたくて、やりたくて、しょうがない。そういう教材を持って教室に行けたら、教室に行くのが楽しいよ。今日、これに対して子どもたちはどういう反応・応答をするだろうって。

でも、毎回そんなことはないですよ。授業の準備があまりできてない時ほど、こっちは饒舌になるし、ダラダラ説明を繰り返すことになります。だから毎回というわけではないけれど、教材研究をやって、これを生徒にぶつけたら何と言ってくれるだろう。どんな議論になるだろ…そういうワクワク、ドキドキで教室に行ける回数を多くしたいと思っています。そんなことを考える場をつくるのが、教室を「戦場」から「民主主義空間」に切り換えていく、その糸口があるような気がしています。

これは私の言葉ですが、あらかじめ決まりきった「正解」はないが、「何でもアリ」ではない。「解なき会の快」。簡単に答えがないから、人が会って、いろいろな人の意見を聴くのは楽しいねって。これを「解なき会の快」と言ったわけです。他教科からみたらどういふことを言っているのかということがあるかもしれないけれど、教室にはいろいろな人がいるので、もし声で言うのがなかなか難しかったら、書かせて、それを紙面で交流するか、やり方はいろいろあると思います。学びを通じて学校を安心・安全な空間にすることに、みなさん、ちょっと意識を向けていただけたらうれしい。

(7) ふたつの「あい」

もうひとつ、高校という、アイデンティティ形成のただなかにある学びにとって、二つの「あい」がとても重要な要素をもっていると思います。高校時代はどういう時代か。一つは自分をつくっていくという時間です。自分はどういう人間なんだろう、どうなりたんだろう。中学時代の何でもかんでも反発する時代はちょっと過ぎて、生き方も含めて高校時代は自分をつくる時代だと考えると、その時期に二つの「あい」がすごく大事ではないかと僕は思っています。

「あい」とは、人を愛しているの「あい」ではなくて、一つは学びあい、支えあい、聴きあい、かかわりあい、活かしあいの「あい」です。HR やクラブや授業のどこかでもいいから、今の高校生の厳しい状況を受けている彼らの中に「あい」はあるのか。どうしても教室でつくれなかったら、クラブでもいい。休み時間でもいい。どこかに「あい」があるか。その「あい」が確かにあったとするならば、そこを補強したり手助けしたり、そういう役割を教師ができたらいいなと。難しくいうと相互交渉と互惠です。お互いにとってすごく心地よい時間や空間になっている。

もう一つの「あい」は、一人称の「I」です。関わり合いの「あい」の中で、その関係性や大勢に埋め込まれない、透明な存在でなくて、私はここにいる。あなたと違うけれど、違うあなたも認めるけれど、私は確かにここにいる。自己確認というか、自分はここにいる、ここにいていい。そういう実感みたいなものを高校生活のどこかの時間でつくれたらいいなと思います。べつに教室のみんなが友だちにならなくていいし、教室や学校が現状からいってパラダイスになることもなかなか難しい。でも繰り返し言いますが、人間ってそう捨てたものではない。私は学校に来てちょっとよかったと思っているというか、そう

いうことを味わえる時間と空間をつくり出すことができたらいい。

みなさんは基本的に授業をしにいくと思っているかもしれませんが、教育実習はホームルーム担任もやります。朝、出席をとって、帰りにホームルームをやって、一緒に掃除をしてという時間の中で、生徒同士の相互交渉とか、関係の中に「あい」はあるのか。埋もれている人はいないか。教室の隅のほうで透明化してしまっている人はいないか。そういう人に対して働きかける、そういう人にこそ目を配るといって教育実習生であってほしいのです。

教師の職業病かもしれませんが、パーティーとか集まりがあるでしょう。そうすると気になるのは、1人でポツンとしている人です。人と話したくないからそうしていることもあるけれど、声をかけられたら言うけれども、自分から声をかけていくのがなかなか難しいという生徒もいます。そういう生徒には教師から「どうしたの」と声をかけていく。そういうコミュニケーションのとり方があるのではないかと思います。

今の話とも通じますが、HR、教科外活動で、何気ない時間に教育実習生に求めるもの、それは「ナナメ」の関係です。実習生というのは僕たちと同じフィールドに立ったら先生だよ、と先ほど言いましたが、とはいえ高校生から見たら、本物の先生と同じというわけでもないのです。たぶん「ナナメ」の関係になると思います。「タテ」の関係は担任教師とか教師。「ヨコ」の関係が生徒。この「タテ」でも「ヨコ」でもない、「ナナメ」の関係だからこそ子どもたちと紡げる時間や関係性があるのではないかと。もしくは、みなさんはフラッと学校にやってきたく教員志望の寅さん>みたいなものです。寅さんというたとえが今の若い人には通じないかもしれませんが。みなさんはフラッと学校にやってきて、フラッといなくなるわけです。その期間だからこそ

できることがある。「担任の教師はああ言っているけどとか、そううまくはいかないよね」とか、生徒の気持ちもわかるし、教師の立場も両方わかる。その「ナナメ」の関係を背負って語ってもらっていいと思います。一時滞在者、通りすがりの者だから言える、できることがあるみたいな感じ。ずっといる人には言えないけれど、ふらっと学校に来た人だから話せるみたいなこともあるかもしれません。

高校生との向き合い方は、対面型ではなくて、これは決してテクニックで言っているわけではなくて、横並びで対象に向かって語るみたいなベンチシート型が良いと思います。冒頭、消費文化の話をしました。放課後、漫画を読んでいる、音楽を聴いている。そうしたら掃除をしている時なんか、横並びで音楽の話をする。「どんな音楽聴いてるの?」。ギターを背負っている子がいたら、「今度バンドでライブをやるの?」って。

やさしい高校生はそういう話に付き合う人もいるかもしれません。忙しいからあんたたちになんか付き合ってもらえないと言う高校生もいるでしょう。実習生の豊かな時間のために、おれのバンドの練習時間を割けないで、って。でも、いろいろな人に声をかけていって、ふっとこたえが返って来るともありません。返ってこないこともあります。みなさん、めげる必要はありません。みなさんも高校時代、実習生が来た時にそんなにやさしく丁寧にしていましたか。高校生ともなると、そっけなくなりましたか?彼らは教育実習生について、それほど、深く考えてはいません。けれども、誰も俺の授業なんか聴いていない、誰も私の言うことを聞いてくれない、って思うかもしれませんが、意外と見たり、聴いたりする。で、自分の授業うまくいった!見てくれていると思ったら意外とすぐ忘れてたりする…そんなものです。たかが教師、されど教師、たかが教育実習、されど教育実習です。

教師は「語ること」よりも「聴きとること」を。語ることも大事ですが、聴きとることです。恋愛のこと、進路のこと、何気ない日常のこと、周囲や友人との関係。「よし、実習ガイダンスで聞いたから、子どもたちから聴きとってみよう、生徒から聴きとってみよう」と、現場に行つて「何？ 何か困っていることない？」と言われても、そんなに簡単に語れるものでもありません。何気ない時間の中で、適度な距離を保ちながら、高校生とはいえ半分大人であり、半分子どもみたいなものなので、あんまり上から視線でもだめだし、かといって、こいつは何考えてるんだ、モンスターだみたいなまなざしを持つのもダメです。朝、夕の HR で、みんなにちょっと語ったり、一人ひとりに語ったり、そういう時間の積み重ねが大事なかなと思っています。

(8) ブリッジとしての教師を生きる

最後です。「ブリッジとしての教師」について話します。これは自分自身に言い聞かせていることでもあります。他者性と対等性を軸に生徒と向き合う、ということです。あたりまえのことですが、生徒は教師にとって他者だということです。そう簡単に思いどおりにならない。かといって、どうでもいいと思ったら教師はできません。そこに葛藤が生まれます。授業など聴いていなくたっていい。教室なんか入ってこなくたっていい。そういうふうになったらどれだけ気が楽かと思うけれど、そう思ったら願いも想いもなくなってしまいます。やはり賢くなってほしい、人の意見を聞ける人になってほしい、自分の意見を言える人になってほしい。この人生は、この世界は生きるに値するって一瞬でも思っただけいい。そういう願いがあるけれども、そうならない現実があつて、この「理想」と「現実」の間に葛藤が生まれるわけです。

逆に、子どもたち、生徒たちをすべてコン

トロールできると思っている人はいないと思いますが、もしいたとしたらそれは傲慢です。そんなはずはない。かといって、他者なのでどうにもならないから、何の願いも生まれまいといったら、それも違うような気がします。その間の細い道を生きる。願いはある。願いどおりにならない。その願いはみなさんの目の前にいる生徒それぞれ違うのではないのでしょうか。進学校の生徒、底辺校、課題山積校と言われてるところの生徒、授業に積極的に参加するクラスの生徒、そうでない生徒、目の前の生徒の現実から課題が浮かび上がってきますから、僕は今ここでこれ以上具体的には言えないわけです。

みなさんが目の前に見た生徒は、どういうふうに生きていて、どこでつまずいたり、どこで喜びを感じているか。その現実から出発して、どういう授業を組もう、どういふかわりあいをつくろうとなっていくのだと思います。ですから、もし時間が許せば、ぜひ実習に行く前の教室や学校の空気を吸って、雰囲気味わっておいていただきたい。打ち合わせで1~2回行くと思いますが、教室を見せてください、実習生が所属していくクラスの様子を見せてくださいと。それができるとはわかりませんが、もし自由の森学園に実習生が来たら、「どうぞどうぞ、見てごらん」って言います。「午後の体育の後の数学は悲惨だよ、半分ぐらい寝てるよ、あなただったらどうする？」「えっ！」みたいな感じで。できれば足しげく通うことをオススメします。教材研究は、家でできることは家でやって、現場に行ったら現場でしかできない時間をたくさん過ごすといいかなと思います。

「ブリッジとしての教師」。この意味をまだ言っていませんでした。生徒と生徒をつないだり、生徒と社会・世界をつなぐ。僕はそういうブリッジ、いろんなものの中に橋を架ける教師でありたいと思っています。みなさんは「ナナメ」の関係を生かしながら、生徒と

生徒をつなぐ。時には、消費社会を生きてま
ったくの異言語をしゃべっているかに見える、
その生徒をどうつなぐか。それは他者をどう
発見させるかということです。あわせて、僕
は社会科ですから、社会・世界と生徒を、学
びを媒介にしてつないだり、というブリッジ
としての教師でありたいと思っています。な
かなかできていませんが。

教育実習期間は2週間ないし3週間。その
なかで、今日お話しした話の何か一つでもみ
なさんのお役に立てることがあれば嬉しく思
います。良い教育実習になることを願ってい
ます。(拍手)